

巻頭言

この一年、世間を騒がせる不祥事が連続して起こりました。特に印象に残るものを挙げると、「冷凍食品農薬混入」事件、「佐村河内守」事件、そして「STAP 細胞」事件です。これらに共通するのは、当事者が平然と嘘をつく人々であったということです。私の感覚でも、おそらく世間一般の常識でも、このような事件は想定外です。もちろん、想定外なので大ニュースになったわけですが。

研究室は、メンバー全員の性善説を前提として運営されています。では万が一、私の研究室で悪意ある事件や不正を起こそうという人があったとしたら、阻止できるかどうか。想定外であって、完全に防ぐことは難しいという答えにならざるを得ません。これは化学系研究室に限らないことでしょう。こうした悪意を阻むものは社会常識あるいは道徳であって、組織構成の前提です。

ところで研究室では、毎年かならず「技術者倫理」または「失敗に学ぶ」という内容を勉強会で取り上げています。有名なスペースシャトル事件の例に始まり、乳業、建築、自動車など各種業界で起こった不祥事のケースを取り上げ、原因と対策、技術者としての判断・倫理基準を検証し、最後に各自の考えを述べてもらいます。教員としても、こうした倫理教育には自負がありました。しかし、いま振り返ってみると、これらケーススタディの多くは、企業・組織の圧力（例えば経営圧力）のもと、技術者個人が如何に行動するか、という点が主眼であり、個人の悪意（例えば冒頭の3事件）への処し方は与えていないことに気が付きます。

つまるところ、研究不正は個人の道徳・良識の問題であり、ケーススタディーはあまり有用ではありません。そこで、この機に改めて、研究室メンバーへ周知することとしました。研究についていえば、信頼性の低いデータ、恣意的なデータは発表してはいけません。合理性・再現性を確かめてからです。結果だけ報告するのではなく、根拠となる元データも整理して提示ください。実験ノートは細かく記録ください。証拠資料となります。過去のメンバーでノートをろくに取っていない人があり、結局論文発表を取りやめたケースがあります。論文を作成する場合、当然ですが人の論文・データ・図表の流用はいけません。自分の論文の流用もいけません。口頭発表なら若干の予備的データでも許される場合がありますが、論文発表は公的記録になりますから妥協してはいけません。STAP 細胞も、論文発表したから大問題になったわけです。

さて最初の話に戻ります。じつは一般の社会組織にも、平然と嘘をつく人はまれに居るのであり、私も苦勞しましたが、これから社会に巣立つみなさんも、いつかそうしたことを経験するかもしれません。しかし、決して負けてはいけません。そして繰り返しますが、不正にはいっさい手を染めないこと、不祥事は一切起こさないこと、自分が嘘をつく側にならないこと。これからの人生本番です。先は長いのですから、人徳を高め、大事に人生を送ってください。

STAP 細胞事件直後という時節柄、今回はつつい厳しい筆致となりましたが、最後はポジティブな話題で締めくくります。今春、博士卒業生が、一人は大学職員を経て准教授に、一人は助教になります。これは指導者として大変嬉しいことです。教育者・研究者として、前途に幸あれと祈ります。

卒業生全員の将来を祈りつつ、今年も年次報告をまとめました。

(2014 年 3 月 持田)